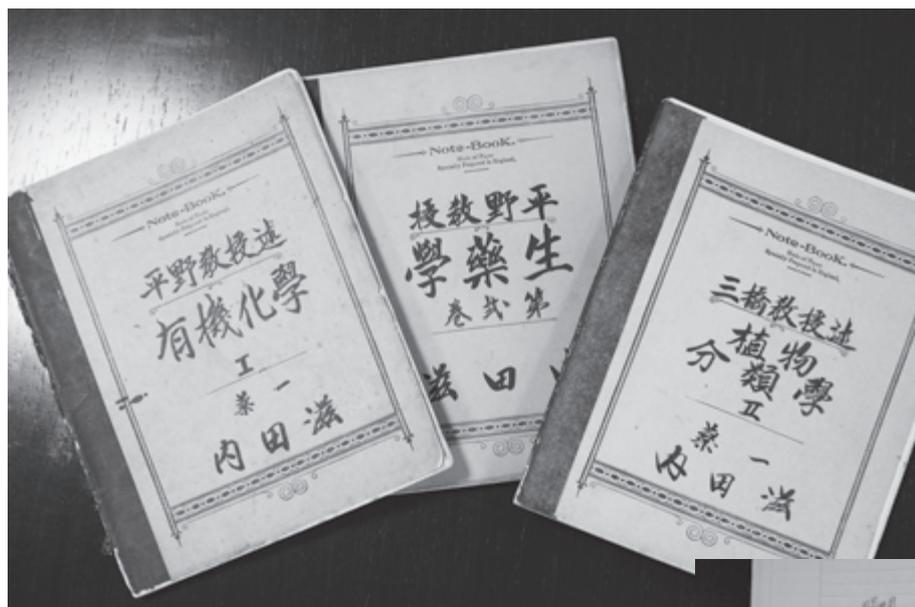


28
2018.5

薬友会報

千葉大学薬友会



薬学部の前身である千葉医科大学附属薬学専門部の時代に書かれた90年前の授業ノート
1924年にご卒業された内田滋様のご家族よりご提供



薬友会長・研究院長挨拶	2
退任のご挨拶	2
医学薬学府・副学府長挨拶	3
会員便り	4
薬学部この一年	7
研究室便り	9
クラス通信	14
支部便り	18
サークル紹介	19
学部だより	20
教員の人事異動	20
2018年度 大学院医学薬学府 入学者の状況（4月入学者）	21

第103回 薬剤師国家試験合格状況	21
2017年度 卒業生・修了生の進路	21
2018年度 薬学部入学者の状況	21
2017年の受賞記録	22
薬友会より	23
第27回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー	
宮木高明記念講演会開催のお知らせ	24
卒後教育研究講座開催のお知らせ	24
編集後記	24

薬友会長・研究院長挨拶

石橋 正己



薬友会会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。薬友会報第28号の発行にあたりご挨拶申し上げます。平成30年度より2年間薬学研究院長・薬学部長に任ぜられました石橋と申します。私が本学部活性構造化学研究室に着任してから早いもので20年半が経過しました。この間、薬友会会員の皆様を始め、多くの皆様方のお世話になってまいりましたが、これから微力ながら少しでも恩返しできますよう努力したいと存じます。どうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

薬学部の最近の主な動きを紹介します。平成18年度に薬学部6年制課程が導入されて以来12年が経過しました。今年（平成30年度）の入学者からは4年制学科卒業生に対して必要な単位を追加履修することにより薬剤師国家試験受験資格が与えられるという経過措置はなくなりました。これと期を同じくして、本薬学部では入試制度を一部変更し、これまで学部定員80名が1年次に一括入学し、学部3年次進級時に薬学科40名、薬科学科40名へ振分けられていたところを、平成30年度からは推薦入試10名は1年次から薬学科、後期入試10名は1年次から薬科学科に入り、前期入試60名についてはこれまで通り3年次進級時に両学科に振分けられることとなりました。このように制度は変更されましたが、平成30年度の入試出願倍率は前期日程6.5倍、後期日程16.2倍と、これまでと同様に全国国公立大学薬学部の中でトップクラスの倍率を維持しました。

今年（平成30年）の第103回薬剤師国家試験合格者は、全国9584名のうち国立大学出身者は543名（5.7%）、関東地区に限ると合格者3848名のうち国立大学出身者は55名（1.4%）でした。この数字から千葉大学出身の薬剤師免許取得者は極めて貴重な人材であり、本薬学部6年制学科（薬学科）の社会的責任は甚だ重大であると言えます。企業や研究機関、行政機関からも、優れた研究能力をもつ6年制学生に対する受入れ要請は増加しており千葉大学薬学部はその要請にしっかり応える必要があります。一方、4年制薬科学科と大学院修士課程への連結的な研究者教育はわが国の薬学の特長であり、高い研究力をもち第一線で国際的に活躍する創薬・生命科学研究者の養成は国立大学薬学部のもう一つの重大な社会的責任です。平成29年度の全国薬学部定員は国公立合計で12967名であり、そのうち4年制定員は1559名、国立大学の4年制定員は644名（5.0%）です。従って、国立大学薬学部4年制出身者もまた非常に貴重な人材であることは間違いありません。本薬学部では高い研究能力と国際的リーダーシップを持つ「特別な資質を有した薬剤師」を養成するため、4年制定員を維持しつつ6年制定員の増員に関する改組計画が策定され進行しています。

一方、薬学部教員の最近の動きとしては、昨年度複数のテニュアトラック教員がテニュア付与と同時に昇進しました。また女性教員の昇進も拡大しています。さらに各種学会賞の受賞や大型予算の獲得など、継続して先生方はたいへん活躍されています。ただ、国立大学法人化以降、国からの運営費交付金が継続的に減額され、定員削減が進行するにつれて、学部・研究室運営や教育に関する業務の複雑化・多様化に伴う負担増が著しく、先生方は毎日多忙を極めているのが実情です。千葉大学は「世界最高水準の教育研究をおこなう卓越研究大学」（いわゆる第3群）に入り、世界と伍して卓越した教育研究を推進することが求められています。そのためには先生方の自由な研究時間の確保が必須であり、業務負担の効率化・軽減化を何とか模索しなければなりません。薬友会会員の皆様におかれましても、現役学生・教員の研究教育活動の推進と成果向上へのご支援を期待いたしますとともに、本薬友会運営業務の簡素化へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

退任のご挨拶

根矢 三郎



私は薬品物理化学研究室の教授として細谷東一郎先生や津田穰先生の後を引き継ぎ、2002年4月に赴任して以来16年間にわたりお世話になりました。2018年3月末をもち、定年退職日を無事に迎えることができました。これもみなさまのお蔭であり、深く御礼申し上げます。

私は1982年3月に京都大学工学部博士課程を修了後、2002年3月まで京都薬科大学で助手と助教授を務めました。その後、有数の総合大学として活発な研究教育を行う千葉大学に移動し、同僚たちが意欲的に研究する姿を目の当たりにして、とてもよい刺激を受けました。しかし、私個人の研究生活は必ずしも平穏ではなく、アイデアを出し続けて論文を書く作業に絶えず追われていました。

研究面では、薬品物理化学の特色を生ずために薬学部で役立つことを意識しながら、ヘムタンパク質の電子状態を決める構造因子の究明を行ってきました。この研究から得られる知見を生かして人工酸素運搬物質

や光線動力学治療法に使うポルフィリン化合物の探索などに有用な情報が得られ、多くの成果を発表できました。2011年には、研究室が住み慣れた西千葉から亥鼻キャンパスへ移動して、大きな環境変化が生まれました。亥鼻の新研究室は広々として、移転作業による研究の一時中断をばん回できました。また、在職中の当研究室には約90名の学部学生と約70名の大学院生が在籍し、研究室スタッフと一丸となり熱心の実験をしていただきました。多くの有能な学生さんと知り合えて、彼らを無事に世の中に送り出すことができたのは、私にとって法外な喜びです。



社会活動では、平成17年から19年にかけて日本薬学会の英文の学術誌*Chem. Pharm. Bull.*の編集員として日本薬学会に貢献できました。平成23年5月には、日本薬学会の物理化学部会が主催する「第21回金属の関与する生体関連反応シンポジウム」実行委員長として千葉大学での開催に尽力しました。さらに、日本学術振興会の科学研究費委員会専門委員として多数の科研費申請書の審査を担当しました。その結果、平成24年度と25年度に、日本学術振興会よりそれぞれ科学研究費優秀審査員賞、特別研究員優秀審査員賞をいただきました。千葉大学で研究教育に携わることができたこの16年間は充実した期間でした。千葉大学薬学部と薬友会が今後ますます若い世代により発展するよう心より願っています。

医学薬学府・副学長挨拶

伊藤 素行



医学薬学府・副学長として、2年目を迎えることとなり、引き続き薬学研究院を担当させていただくことになりました。

昨年は日本薬学会第137年会での学生優秀発表賞（7名：参加大学中4位）、第90回日本薬理学会年会優秀発表賞、日本化学会第97春季年会学生講演賞、日本薬物動態学会第32回年会ベストポスター賞など多くの院生が表彰され、この3月には修士課程総合薬品科学専攻47名、後期3年博士課程先端創薬科学専攻14名、博士4年先端医学薬学専攻5名が課程修了致しました。中でも博士4年先端医学薬学専攻では、優れた研究業績を上げた場合に認められる早期修了制度により4名が3年で課程修了しました。

医学薬学府薬学領域では、グローバル人材育成促進のため、様々な取り組みを続けています。一昨年度からスタートした外国人留学生を対象とした修士課程入試選抜方法を実施し、4名が入学しました。博士課程では、1大学の枠を超えたグローバルな学位プログラムの構築を進めています。ダブル・ディグリー・プログラム（統合された学修プログラムを提供する2大学により学位記を授与）が、これまでのタイ王国シルパコン大学薬学部、同マヒドン大学薬学部に加えて、同チェンマイ大学薬学部ともスタートし、一昨年度から、シルパコン大学およびマヒドン大学のダブルディグリー学生が千葉大学にて研究活動を開始しています。短期間の大学院生の海外派遣受入も行い、昨年度は、派遣：3名、受入：11名（特別研究学生6、研究生5）が研究交流活動を行いました。

医学薬学府では、文部科学省支援プロジェクト博士課程教育リーディングプログラム「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」やがんプロフェッショナル養成プランが実施されています。昨年度、薬学領域では博士課程3名がリーディングプログラムに所属し、がんプロフェッショナル養成プログラムでは1名の修了者が出ました。がんプロフェッショナルは、昨年より新規プログラム「多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン」が開始され、他大学の医学・看護学部との連携により、がんゲノム医療、がんライフ・QOL医療の教育環境を充実させます。医学薬学府では、今後も教育制度や研究環境をより充実させ、薬学・医学の未来を担う基礎生命科学ならびに医薬品創製に貢献できる国際性豊かな独創性ある研究者、高度の専門技術と研究能力を備えた先進的医療人の次世代リーダーの育成に努力してまいります。引き続き薬友会会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

会 員 便 り

山見 徹



平成8年3月の博士前期課程修了まで生化学研究室でお世話になりました。その後は基礎研究者を志望し、博士の学位を取得しましたが、紆余曲折して現在は保険薬局の勤務薬剤師をしています。街の薬局の子として育った自分にとって、薬局は「処方せんを通しての関係にとどまらず、近所の方の健康相談のファーストアクセスの場でありたい」というのが理想です。しかし、この理想に近づくためにはまだまだ力不足であると感じる日々です。力をつけるための一環として、日本プライマリ・ケア連合学会のプライマリ・ケア認定薬剤師を取得しました。自分の目指しているものと近い内容が学べるという動機でしたが、ここでの研修は、座学だけでなくグループワーク等がおこなわれることが特徴で、研修の中で様々なバックボーンを持った薬剤師の方々、そして、医師を初めとする他職種の方々と話すことはとても刺激となり、ただ講義を聞いたりするだけが学びではないとの気付きになりました。そのつもりで周りを見れば、twitterやブログで情報の発信や交換をしている薬剤師の方々も多数おり、ひいてはネットの上で臨床医学論文の抄読会をするということもおこなわれています（ぜひ“AHEADMAP”で検索を）。今後も様々な形の学びを続けていきたいと思ひますし、その中で千葉大学の仲間ともお会いできるのを楽しみにしております。（平成10年卒業）

石田 寛明



私が6年制一期生として、2006年4月に千葉大学薬学部に入學して早12年が経とうとしています。学部3年次に薬科学科（4年制）を選択後、学部4年から博士3年までの6年間を生体機能性分子研究室で過ごし、高山廣光教授のご指導の下、天然物合成の研究に従事しました。諸先生方や研究室メンバーに恵まれ、非常に充実した研究室生活を送ることができました。西千葉キャンパスから現在の亥鼻キャンパスに薬学部が移転するのに伴い、修士2年の夏の暑い中、研究室の引っ越しをしたのもいい思い出です。

博士号取得後は、有機合成一筋であった学生時代からは一転、昭和薬科大学で助教として、化合物（リガンド）だけでなく、タンパク質や細胞と格闘する毎日です。現在は、核内受容体の一員であるビタミンD受容体とペルオキシソーム増殖剤活性化受容体（PPAR）を分子標的として、リガンド探索・分子設計と機能解明に関する研究に取り組んでいます。タンパク質とリガンドの共結晶の構造解析や細胞を用いたアッセイなど実験内容は変わりましたが、有機化学をベースとした新しい研究に挑戦し、楽しい毎日です。タンパク質のX線結晶構造解析のために、つくばにある高エネルギー加速器研究機構でも実験しています。千葉大学とは異なり、6年制の学生しかおらず、大学院生も非常に少ない環境ですが、教育一辺倒ではなく「研究力」のある薬剤師を育成できるように、日夜一緒に研究しています。学生時代に引き続き、これからも「世界初」を目指して、日々研究に精進していこうと思っています。（平成26年度博士課程修了）

荒川 雄一郎（地方独立行政法人栃木県立がんセンター薬剤部 主任）

学部4年から修士2年まで遺伝子資源応用研究室でご指導頂きました。修士課程を修了後、栃木県庁に入庁しました。配属が栃木県立がんセンターでしたが、県立病院の地方独立行政法人化の波もあり、今は同病院の法人職員として勤務しています。

当院は病床数291床で、都道府県がん診療連携拠点病院です。薬剤師17名で中央業務、病棟業務、抗がん薬調製、臨床試験コーディネート等を行っています。今後業務拡大のため増員を予定しておりますので、栃木方面にお住まいでご興味のある方は当院ホームページをご覧くださいましたら幸いです。

現在は外来患者への服薬指導、感染制御チームの専任薬剤師として、抗がん薬治療を受けられる患者・家族への情報提供や支持療法の提案、抗菌薬使用状況の監視、抗菌薬適正使用への提案に携わっています。また、地域連携センターの業務を兼任し定期的に県内の薬剤師に向けた医薬連携研修会を実施しています。さらに多施設共同の臨床試験に参加したり、広く活動しています。今後も質の高いがん医療の提供と県内のがん診療の連携協力体制構築に取り組んでいきたいと思ひます。（平成15年卒業）

平野 武明



千葉大学薬学部薬物学教室卒業後、直ちに製薬会社に入社し、37年9か月間勤務しました。在職中は終始研究開発部門の仕事でした。薬剤師免許は取得していましたが、活用の場面はありませんでした。ところが退職11年後、当該免許を活用する場面が訪れました。友人から病院薬剤師を勧誘され、70歳を越えていましたが、勇気をもって引き受けました。それから仕事に慣れた1年半後、今度は関連施設の「介護老人保健施設」に転勤となりました。週3日間のパート薬剤師です（今年4年目）。

介護保険施設には、数の多い順から「特別養護老人ホーム（特養）」、「介護老人保健施設（老健）」そして「介護療養型医療施設」の3種類があります。それぞれ特徴があるようです。「老健」について簡単に説明しますと、病院と自宅の中間的施設で、「要介護1」以上で65歳以上の高齢者向けの施設です。専門スタッフによるリハビリを通じ、在宅復帰を目的としています。医療体制として、常勤の医師、看護師、理学療法士、

作業療法士、介護福祉士、管理栄養士、薬剤師などの専門スタッフで構成されています。

昨年厚生労働省公表第22回生命表によりますと、日本人の平均寿命は男性80.75歳、女性86.99歳ですが、健康寿命（日常生活に制限のない期間）との差（不健康な期間）は男性約9年、女性約12年の統計があります。今後平均寿命の延伸に伴い、その差が拡大すれば、医療費や介護コストが増大します。医療関係者の更なる努力（疾病予防・治療・介護）によって、平均寿命と健康寿命の差を短縮することができれば、老人のQOL低下を防ぐとともに、社会保障負担の軽減も期待できます。薬剤師の新たな活躍の場が広がります。

(昭和40年卒業)

藤井 亜矢子



1999年に薬学部に入學し、薬物学研究室にて大学院修士課程を修了後、2005年より製薬企業で臨床開発業務に携わっています。2015年までは国内開発業務に携わり、主に感染症やワクチン領域を担当し、複数のプロジェクトで承認取得を経験するという幸運に恵まれました。2016年より日本以外のアジア開発担当となり、現在はアジア地域を含むグローバル試験の推進ならびにアジア各国での薬事申請業務に携わっています。アジア諸国の医療環境や新薬開発に対する取り組みは日本と大きく異なっており、国内開発業務を通じて得たこれまでの経験がまったく通用せず挫折感を味わうこともしばしばですが、言葉の壁や慣習の違いを乗り越えて得られる成功体験が自分自身の大きな成長につながると信じ、日々奮闘しています。

本寄稿の依頼を受け、期待するデータがなかなか取得できずに悩みながらも、“焦らずできることから少しずつ”と過ごした研究室在籍時代を懐かしく思い出しながら、自分の原点は大学時代にあるのだと改めて感じています。卒業して14年がたちますが、千葉大学出身の諸先輩方や後輩の皆さんには日頃の業務でも多大なるご支援をいただいております、千葉大学で過ごした日々は私にとってかけがえのない財産となっています。

(平成15年卒業)

山内 志真 (あすか製薬株式会社薬理研究部)



私は、平成7年3月に修士課程を修了し、帝国臓器製薬（現あすか製薬）に入社しました。以来、20数年にわたり研究職として今日まで勤めて参りました。学生時代は、動物を扱ったことがほとんど無く、初めは投与一つとっても苦勞しておりました。しかし、職場の方々の暖かいご支援により、業務にも徐々に慣れていくことができました。気がつけば、自分の子供でもおかしくないような年代の社員が入社してくるようになり、月日の経つのが早いことを感じます。

新薬開発の中心は、低分子化合物から生物製剤へシフトしていき、以前にも増して開発の難易度が上がってきています。医療制度改革の波も押し寄せ、長期収載品に頼らず、新薬を出し続けていくことがいかに困難であるか、時々心が折れそうになることもありました。そんな時、論文や学会発表等で大学時代にご指導下さった先生や先輩方、友人の活躍されている姿を目にすると私もまだまだ頑張らねば、と刺激を受けております。研究者人生も残り短くなってきましたが、一つでも新薬を患者様にお届けできるよう、これからも精進して参りたいと思っております。

(平成5年卒業)

鈴木 敬子



長年勤めた病院を退職してから、生活が一変しました。以前は、朝早くから夜遅くまで病院で過ごし、世間を騒がす重大事件を知らないこともありました。もちろんサービス残業でした。それが今では、仕事は定時で終え、エアロビクスやテニスを楽しんでいます。昭和の働く女を地で行っていた伯母などは、「定年退職した人みたいね」とあきれています。

人間関係と行動範囲は狭くなりました。半径2km圏内からほとんど出ていません。名駅まで30分ですが、その名古屋にも滅多に行きません。

そんな私が、年に3回だけ、名古屋まで出かけて行く日があります。名古屋市立大学の卒業後教育講座で、以前の職場の先輩であるAさんとご一緒できるからです。Aさんは、昭和55年卒の千葉大の大先輩でもあります。

私が病院に入職した頃、愛知県では、国立大卒の薬剤師は動物園のパンダ並みに珍しい時代でした。加えて、ある特定の大学出身者が、かなりの割合を占めていたので、いろいろな面で大変でした。それでも、病院薬剤師として一通りのことを経験し、全うとは程遠くとも、六分七分の仕事ができたのは、A先輩の公私にわたる助けがあったからだと思っています。千葉大でよかったなと思うことの一つです。(平成3年卒業)

伊藤 淑子



薬学部入学時、私はいわゆるバーンアウト症候群で、与えられている素晴らしい環境に向き合わず、無為に学生生活を送っていたように思います。そんな私を暖かく励まし、次のステップへと導いてくださった先生方、ご同輩の方々に深く感謝しております。

卒業後、千葉大学医学部附属病院薬剤部にて、半年の研修を終え、当時遅れ気味だった千葉県の救急医療を担うべく新設された県立救急医療センターの職員となりました。ここで色々な職種の方と協力して患者さんの治療にあたることに、準備段階から関わらせていただ

けたのは、私にとって目を見張る素晴らしい経験となりました。

結婚後は、小さな診療所の窓口を通して、患者さんと関わり、医療に携わってきましたが、大学に入って初めて教えていただいた、『薬は、両刃の剣である』という事と、研修時代に最初に教えていただいた、『病院薬剤師のホスピタリティー』は、今も私の大事な指針となっております。

これから私達を取り巻く世界はスピードを上げて変化していくことと思いますし、また私自身や家族も変化をしていくことでしょう。それは、楽しみな事でもあります、恐ろしさもあります。与えられている環境のなかで、感謝して日々歩んでいけたら、幸せなことだと思っています。
(昭和54年卒業)

佐々木 美幸



卒業後は、テルモ株式会社技術開発部に勤務ののち結婚、子育てをしながら、主人の転勤先での調剤薬局、薬店でのパート勤務などを経て、現在は埼玉の調剤薬局でパート勤務をしています。これまでいろいろな職場や講演会などで千葉大出身の方々に出会い、そのご活躍に良い刺激をいただき、とても温かく接していただきました。薬剤師の仕事を経年続けて来られたのも、いろいろなアドバイスをくれる心許せる諸先輩や同窓の友人達のおかげだと感謝しています。

調剤薬局では患者様に丁寧に接することを心掛けていますが、薬や症状についてアドバイスさせていただいたことを患者様に喜んでいただいた際には、特に大きな喜びを感じます。父のパーキンソン病闘病の経験から、薬の適量使用の大切さを再認識し、いろいろな経験から、漢方やポリファーマシーの問題にも興味を持つようになりました。

40代後半から夫婦でジム通いを始め、現在はジャズダンスに嵌っています。音楽に合わせて体を動かすことでストレス発散、脳もフル回転し、続けることで姿勢や膝の痛みも改善されていきました。身体を動かすことが健康寿命の維持に大切だとつくづく感じる今日この頃です。

今年は77Pの同期会が盛大に行われるようでとても楽しみです。これからも、少しでも社会に貢献できるように過ごしていきたいと思っています。
(昭和56年卒業)

堀江 透



定年まで5年半を残してエーザイ(株)を早めに退職して、企業内研究者の育成と研究開発のコンサルティングを主たる業務とする(株)ディ・スリー研究所 (d3researchlabo.com) を設立致しました。2001年にキメラマウスの医薬品開発への利用をビジネスとした受託試験会社「(株)フェニックスバイオ」の設立に参画、2009年に鳥取大学染色体工学研究センター客員教授の傍ら鳥取県産業振興機構とっとりバイオフロンティアR&Dコーディネーターとして人工染色体技術の普及に努めております。2010年には「蛋白の絶対定量技術」を基盤とする東北大学発ベンチャー「(株)Proteomedix Frontiers」を立ち上げ、代表取締役として活動しております。2015年には自宅に「つくば将棋サロン」を開設して地域の皆様方の憩いの場所となっております。「人生に定年はない。老後も余生もないのです。死を迎えるその一瞬まで人生の現役です。人生の現役とは自らの人生を悔いなく生き切る人のことです。そこには「老い」や死への恐れはなく「尊く美しい老い」と「安らかな死」があるだけです。(道元からのメッセージ)

生涯現役を貫きながら、月1回の源泉掛け流し温泉巡りと坂本龍馬の足跡を訪ねての旅、面白い旅行を計画して人生を楽しんでおります。いくつになっても高い志を掲げ、世のため、人にために働くことから生きがいが生まれるのだと思います。「自らの人生は自ら切り開く」生き方を、多くの方々に支えられながら、今日まで無事過ごせていることに感謝しております。
(昭和45年卒業)

原 修一



供給不足のワクチンを接種できたにもかかわらず、猛威をふるうインフルエンザにかかり、タミフルで回復したところです。症状が比較的軽かったのはワクチンのおかげでしょうか。プライベートでは実母・義母の介護に日夜奮闘しつつ、医大の法医学教室に勤務し、主に研究と教育、その他解剖実務(ほんの少し、現在休止中)に携わっていますが、同僚とは、老老介護ならぬ老老実験だと笑い合っています。近年、公的研究助成金の運用基準が緩和されて期間延長が可能となり、介護がその事由の1つに該当するため非常に助かっていますが、一方では研究倫理における自己管理が強く求められています。今後、研究予算獲得競争の激化、また研究結果の評価の厳密化(有意性の指標P値の閾値を0.05から0.005に下げるべき; Nature (2017-08-03), doi: 10.1038/nature.2017.22375) など、研究環境はさらに厳しさを増していきそうです。つい先日年金受取申請書が届きました。リタイア後には平日にJR各社の交通博物館、原鉄道模型博物館、大和ミュージアムなどなどを夫婦で堪能するという目標を胸に「毎日HAPPYに」を心がけて日常に流されている私です。写真は、ドイツ戦車博物館(ムンスター)の“シュツルムティーガー”の前で満足しているところです。
(昭和58年卒業)

千葉大学「戦略的重点研究強化プログラム」・「リーディング研究育成プログラム」

平成27年度より、齊藤和季先生を推進責任者とする「ファイトケミカル植物分子科学」が本学をリードする6つの研究課題の一つとして「戦略的重点研究強化プログラム」に採択されています。本課題では、薬学研究院を中心として全学の6部局が関与し、有用植物成分の生合成や機能に関するゲノム科学、天然物化学、環境応答に関する基礎および応用研究を推進しています。今年度はさらに、中堅若手教員が中心となって提案する次世代卓越研究としての「リーディング研究育成プログラム」に、川島博人先生を推進責任者とする課題である「千葉大学糖鎖創薬研究拠点の創成」が採択されました。本課題では、糖鎖生命科学を基盤とした大学発創薬を目標としています。また、同時に秋田英万先生を推進責任者とする課題として「千葉大発ナノDDSによるRNA創薬プラットフォームの実装」が本プログラムの候補課題として採択されました。本課題では、生体内環境応答性材料から形成されるナノ粒子の体内・細胞内動態制御技術を開発し、遺伝子・核酸医療を実現したいと考えています。いずれの3課題も、本研究院の教員がコアメンバーとなったプロジェクトであり、薬学研究院が一丸となった研究が一層加速すると期待されます。

薬友会報・教育GP

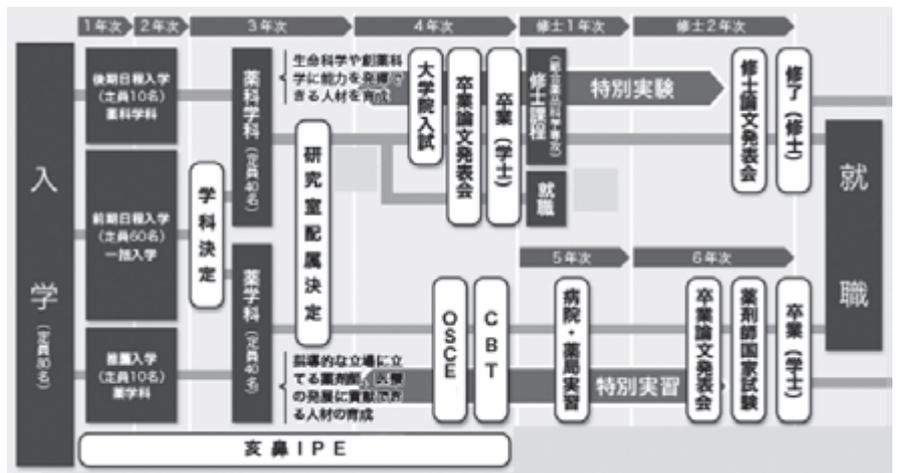
平成29年度の千葉大学教育GP「グローバルエイジング時代の地域包括医療ケアを支える先導的薬剤師育成プログラムの開発—世界へ発信できる教育モデルの開発を目指した取組—」には、9名の薬学部学生が参加してくれました。講義、スキルトレーニング、e-ラーニングで知識や技能を身につけ、在宅現場での実習を通して在宅における薬剤師の役割を学習するプログラムで、千葉市内の薬局薬剤師や診療所医師の在宅訪問に同行し、活動の実際を体験する他、海外の薬学部や病院、薬局を見学しました。3月14日には学生活動報告会を行い、各人の学びを共有しました。今後さらに効果的な教育プログラムを目指してゆきたいと思っています。



ケアカフェばに参加して（9月8日）

新しい入試システムの導入

千葉大学薬学部では平成30年度大学入試より、定員80名の一括入学・3年次に学科振り分けの入試方式から、一括入学・学科別入学を併用した入試方式に変更しました。具体的には、定員80名のうち、推薦入学の定員10名は最初から薬学科に在籍、前期日程の定員60名は従来通りの一括入学で3年次に各学科に振り分け、後期日程入学の定員10名は最初から薬科学科に在籍することになります。入学後に教養科目・専門科目を学んだ上で自分の進路を決定する方法に加えて、最初から学科を決めて自分の学びたいことを入学時から広く学べるという選択肢が加わりました。自分に適した入試方式で入学したのち、大学での幅広い教養と専門分野に関する資質・能力が身に付けられることを期待しています。



国際交流の現況

本年度は協定締結校のうちタイ王国チュラロンコーン大学、シルパコーン大学、シーナカリンウィロート大学薬学部から計6名の3か月インターンシップ留学生が来日しました。他にも上記大学からは短期交換留学生（40～60日間）が本学を訪れ、交流を深めました。また博士ダブルディグリー協定による1年間の就学のため、シルパコーン大学薬学部から来日した博士課程大学院生が研鑽を積んでいます。更に新たな交流協定締結を目指し、タイ国メイファンルアン大学化粧品学部（College of Cosmetics）から教員3名が来訪しました（写真）。タイでは薬学部の研究領域として機能性食品学、化粧品学が盛んに組み込まれており、薬剤師教育、創薬科学研究との調和を目指す傾向にあるようです。一方協定校である台湾の台北医科大学薬学部、フィリピンセントトーマス大学薬学部とも大学院生の交換留学交流が具体的に計画されています。また韓国ソウル国立大学薬学部、タイマヒドン大学薬学部とのジョイントシンポジウムも回を重ね、2018年度内に千葉、バンコクで開催を予定されています。特にマヒドン大学サラヤキャンパス内には、千葉大学サテライトキャンパスが2017年度秋に開校し、現地での交流が開始されました。今後千葉大学他学部とも協力してこのサテライトキャンパスを活用していきたいと考えています。本学在校生も毎年コンスタントに短期交換留学生として各地を訪問し、成果を挙げています。これまで深い交流実績をもつ協定校との関係を更に深めるとともに、分野を超えて世界中の大学との交流を開拓しより質の高い薬学教育環境の整備に勤めていく所存です。今後益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



成績優秀者賞・修士論文優秀発表者決定

3年博士課程 中山弘貴さん、修士課程 佐藤圭悟さんが医学薬学府長表彰成績優秀賞を受賞しました。受賞者は、3月27日の学位記伝達式において表彰されました。また、平成25年度修士論文発表会からの試みとして、優秀な発表を行った学生に対して「修士論文優秀発表賞」を実施しております。選考では研究内容、発表態度、質疑応答等が審査されます。平成30年3月1日、3月2日に行われた修士論文発表会では、昨年度に負けず劣らず素晴らしい発表がされました。平成29年度は、治福溪さん、富澤智史さん、藤森惣大さん、本間榛花さん、松本光希さん、森田暁洋さんの発表が優秀発表賞に選ばれ、3月27日の学位記伝達式の際に行われた表彰式で、表彰状と記念品が授与されました。



向かって左から中山弘貴さん、本間榛花さん、富澤智史さん、藤森惣大さん

第13回ソフトボール大会を開催



2017年度も恒例のソフトボール大会が8月末に開催されました。15研究室による14チームが参加し、晴天の中暑さにも負けない熱戦が繰り広げられました。試合中はプレーごとに一喜一憂したり敵味方関係なく応援し合う場面が数多く見られ、研究室内外問わず交友を深められたと思います。決勝戦は非常にレベルの高い試合となり、規定回数内では決着がつかず11回の延長戦の末、5-4で微生物薬品化学が最強村山軍団を下し優勝しました。来年度は亥鼻グラウンドが医学部校舎建設のため使えずソフトボール大会の開催については未定ですが、研究室間で交流を深められる行事は今後も開催されるといいですね！

研究室便り

薬化学

卒業生の皆さん、最近の根本研究室の動向は以下の通りです。

☆2017年4月、中島助教が着任しました。チェ君が博士学生として当研究室に戻ってきました。

☆2017年8月、恒例の研究室対抗ソフトボール大会に参加しました。

☆2017年10月、福田君が博士学生として当研究室に戻ってきました。

☆2017年12月、研究室旅行で伊香保温泉に行きました。

☆2018年2月、長野でスノーボードを楽しみました。

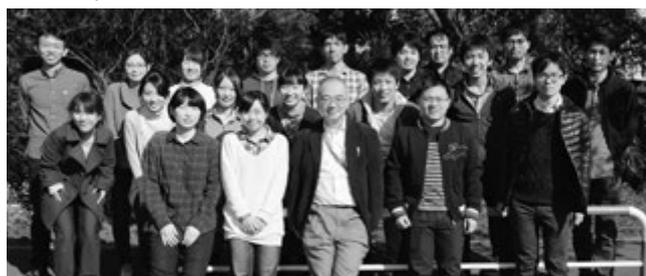
☆2018年3月、仲野君、中山君、加藤君、梶原君、村上君、村田君、リンさんが学位を取得し社会に飛び立ちました。

2018年度は、新たに博士学生が3名、学部生が4名加わり、総勢25名で研究室を運営していきます。



薬品合成化学

卒業生の皆様、元気にお過ごしでしょうか？薬品合成化学研究室では、副学長を兼任する西田篤司教授のもと、教室全員が一致団結して有機合成化学の研究に打ち込んでいます。博士後期課程の研究業績発表会では、竹田君・堀君とも立派に英語口頭発表を終えました。卒論発表を英語で挑戦する猛者も現れ、一段と活性化された研究室になりました。2月からは新たに配属された3年生が実験を始め、さらに若返っています。研究の軸である新しい合成反応の開発と複雑天然物の全合成では、学生諸君の日々の努力が素晴らしい成果を生み出しつつあり、今後の展開に大きな期待を寄せています。



生体機能性分子

29年度は高山教授、北島准教授、小暮助教と博士課

程4名、修士課程13名、学部6年生1名、学部4年生4名、タイからの留学生1名の計23名の学生が在籍し、アルカロイドをターゲットにした合成研究、成分探索研究、医薬化学研究に取り組みました。高山教授が「生物活性アルカロイドの探索・全合成と医薬化学研究」で平成30年度日本薬学会賞を受賞、小暮助教が平成29年度日本生薬学会学術奨励賞を受賞しました。

また化学同人より、高山教授編著「アルカロイドの科学」が出版されました。ご興味のある方は、是非一度手に取ってご覧下さい。学会の優秀発表賞や学位論文の題目などにご興味のある方は研究室のHPをご覧下さい。



活性構造化学

平成29年度の活性構造化学研究室メンバーは四年生(薬科学科)5名、薬学科六年生5名、修士課程9名、博士課程7名で全部で学生26名です。1月からは3年生3名も加わり大人数となりましたので実験台や机のスペースの確保は大変でした。博士課程7名のうちの2名は中国からの留学生です。二人とも瀋陽薬科大学の出身であり、千葉大学との友好的な大学間交流を通じて、修士課程から入学し、当研究室に5年在籍しました。二人ともこの3月に博士課程を修了し、無事に学位を取得することができました。幸運にも二人ともロータリー米山記念奨学金を取得し、同クラブ会員の皆様のご寄付に基づき手厚いご支援を賜りましたことをここに感謝いたします。



製剤工学

2018年4月に研究室の同窓会を開催しました。100名を超える卒業生が集い、大盛会となりました。2017年度は、海外雑誌に10報の論文を発表、また東准教授が薬剤学会奨励賞を受賞するなどの研究成果を上げました。本年の卒業生5名は、1名が博士後期課程に進

学、4名が製薬・化粧品関連の研究職（沢井製薬、大正製薬、日本化薬、ポーラ化成工業）で活躍しています。国際交流も引き続き盛んで、中国・タイからの留学生計4名が大学院生として在籍しており、また日本人学生もフィンランドやタイランドに短期留学しました。ポーリングや青葉の森公園でのBBQなど様々なイベントで士気を高めながら、本年度も研究活動に邁進していきます。



薬品物理化学

研究室では物理化学解析や計算科学的手法による創薬研究を進め、平成29年度は*Biochemistry*, *Tetrahedron*, *J. Org. Chem.*, *Chem. Pharm. Bull.* などに論文を発表しました。研究室で学生たちは、定期コンパや研究室旅行などで日ごろの憂さ晴らしをしています。また3月には、博士課程3年のイラン人留学生Majid Vahedさんが学位を取得しました。特筆すべきは、根矢三郎教授が年度末に定年退職されたことです。根矢先生には16年間にわたる教授任期中の研究教育への貢献により名誉教授の称号が付与されました。卒業生の研究室訪問をいつでも歓迎しますので、ぜひお立ち寄りください。



遺伝子資源応用

本年度も植物の薬理成分や機能性成分の生合成研究に精力的に取り組んでいます。研究成果は学術論文や学会発表を通して報告するほか、メディア等を通して広く国民に発信するよう務めています。昨年度は斉藤和季教授がNHKの「視点・論点」やBayFMのNEC presents「ザ・フリントストーン」に出演し、植物に含まれる薬理成分やその生産メカニズムについて分かりやすく解説しました。最近の研究活動の詳細については、研究室ウェブサイト (<http://www.p.chiba-u.jp/lab/idenshi/>) をご覧下さい。今後も研究活動に邁進していきたいと思っておりますので、引き続き温かいご支援をお願い申し上げます。



分子細胞生物学

今年度は、教員2名、大学院博士5名、修士6名、学部生6名が在籍し、がん細胞のシグナル伝達の研究に取り組んでいます。山口憲孝テニユアトラック助教は、本年1月から分子心血管薬理学研究室准教授に昇進され、臨床研究を視野に入れて当研究室と分子心血管薬理学研究室との共同研究連携を進めております。現在、チロシンリン酸化によるエピジェネティクス制御、上皮間葉転換シグナル、DNA損傷によるチロシンリン酸化シグナルなどの研究が進んでいます。平成29年度日本生化学会関東支部例会と第61回日本薬学会関東支部大会では、平田健介君と徳武友香さんが優秀ポスター賞に選ばれました。卒業生の皆様、どうぞお気軽にお立ち寄りください。



生化学

平成29年度は、教員3名、学生25名、職員2名、総勢30名になりました。毎年増加する人口に対応すべく、研究室内の模様替えを少しずつ行っています。春のお花見、初夏のBBQ大会、夏のソフトボール大会、研究室旅行が研究室の年中行事になっており、忙しい研究生活ですが皆で楽しんでいます。研究面では培養細胞、ゼブラフィッシュ、ショウジョウバエを研究材料として、細胞内のシグナル伝達から個体の記憶・行動、病態モデルの作製など幅広い研究テーマに取り組んでいます。1月には学部3年生5名を研究室に迎えました。新たな体制で研究室員同士、切磋琢磨しながら研究活動に邁進していきたいと思っております。



免疫微生物学

本研究室は、スタッフ3名（川島博人教授、高屋明子准教授、平川城太郎助教）、博士後期課程3名、博士前期課程9名、学部生9名、研究生2名で構成されています。留学生も4名となり、国際化も進んできました。川島教授が着任してから2年半が経ち、糖鎖免疫学と微生物学を融合させた新たな研究が進みつつあります。3月には博士後期課程に進学した佐藤裕之君が修士論文優秀発表賞を受賞しました。8月には、学部内のソフトボール大会で優勝することができました。

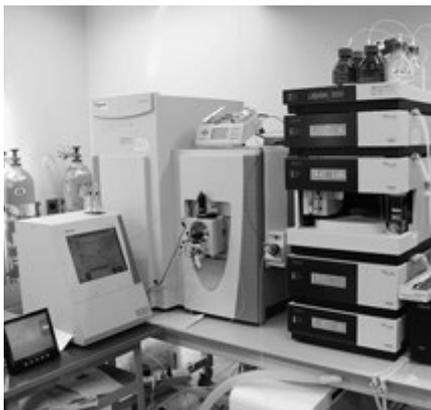
これからも1日1日を大切に、皆で協力しながら、楽しくそして真剣に研究に取り組んでいきたいと思いをします。



遺伝子創薬学

遺伝子創薬学研究室は、公益財団法人かずさDNA研究所との連携講座です。

1) 中山らは、新規部位特異的組み換えシステムを用いたゲノムエンジニアリング技術の開発と疾患モデルマウスの開発研究、2) 鈴木らは、次世代シーケンサー／質量分析機器によるトランスクリプトーム解析／メタボローム解析を通して、機能性代謝物の生合成研究及びトランスオミックス統合解析における新規解析手法の技術開発、3) 大関らは、人工合成したDNA配列からヒト人工染色体を作成し、創薬に役立つ研究を行っています。我々は、生命のゲノム情報を基に、先端のDNA塩基配列決定技術や質量分析技術を駆使し、病気の発症機構の解明と創薬を目指しています。



病態分析化学

平成29年度はスタッフ・研究員・学生を併せて21名で活動しました。研究室では引き続き糖鎖とポリアミンの分析に基づいた生命現象の解明に取り組んでいます。この1年はタイからの短期留学生を数多く迎え、国際交流の活発な年でした。大きなトピックとして、博士課程の岡本悠佑さんが「天然物由来グリコサミノグリカンの網羅的解析とその簡易分析法の開発」で学位を取得し、4月から特任助教に就任することになりました。更に、東恭平先生が4月から東京理科大学薬学部へご栄転となりました。平成30年度は新4年生が5名加わり、新たな体制で研究室を盛り上げていきます。卒業生の皆様、いつでも顔を出しに来てください。



分子画像薬品学

本研究室は、4名の教員と博士課程4名、修士課程4名、学部学生10名、秘書1名の総勢23名で構成されています。本研究室では、がんの画像診断薬剤やアイソトープ治療薬剤の開発研究を進めており、最近では、これら研究の両輪を融合したtheranostics (therapy + diagnostics) への展開も目指しています。コンパ、研究室旅行、秋のソフトボール大会を楽しみつつ、日々研究活動に励んでおります。OB/OGの皆さま、いつでもお立ち寄り下さい。



予防薬学

平成29年度は、教員3名(うち1名は国際創薬学)、博士課程学生2名、修士課程学生7名、学部学生9名、補佐員2名の体制で活動しています。8月からMarcelo Verdugo特任助教がチリから着任し、またチリのPontifical Catholic University of Valparaísoから博士課程学生のNicole Roldánさんが4ヶ月間滞在しました。さらに中国の南昌大学から博士課程学生の胡振瀛(Hu Zhenying)さんが10月から1年間の予定で滞在しています。小椋教授は、医学研究院・法医学教育研究センターの教授を兼任し、薬学における裁判化学・法中毒学の研究教育にも注力することとなりました。



環境リスク

環境リスク研究室は、環境中に存在する化学物質の有害性メカニズムや曝露評価を研究しています。国立環境研究所に設置された連携講座で、中島大介教授(環境リスク・健康研究センター、主席研究員)、青木康展教授(同フェロー)、小林弥生准教授(同主任研究員)が教員として所属しています。主なテーマは、大気や環境水の化学的測定とバイオアッセイによる毒性測定の統合的な



アプローチによる研究、環境から曝露される化学物質が生体内で突然変異を誘発する機構、分析化学的手法を用いた、ヒ素やセレンなどのメタロイドの代謝および毒性機構などの研究です。また、本研究室の大きな特徴は、実際の環境中に存在する化学物質リスク評価につながる研究に注力していることです。

薬効薬理学

現在（3月）は、教員2名、大学院生7名、学部生9名、研究生1名、技術補佐員3名が在籍しています。ここ数年セラミド代謝を中心とした薬理学研究を進めてきましたが、昨



年度は疾患治療薬の開発に向けて大きなはずみを得られました。中村浩之准教授を中心として、昨年4月からニーマン・ピック病C型（NPC）の治療に関する研究（AMED難治性疾患実用化研究事業）を開始し、7月からは特発性肺線維症治療薬の探索（AMED創薬支援推進事業）を進めております。国際創薬学研究室の山形一行特任助教とも連携してNPC患者さんの細胞からiPS細胞を作成し、神経細胞へ分化させることにも成功しました。肺線維症の研究に関しては本学医学部の呼吸器外科・内科等の先生方と連携して研究を進めております。リヨン大学（仏）へ留学した山崎璃沙さん（9月に博士修了）の将来も楽しみです。

薬物学

H29年度より田中浩揮先生、H30年度より櫻井遊先生が特任助教として就任しました。准教授の小林カオル先生や医学部の降幡知巳先生と共に、DDS、薬物代謝・トランスポーター、BBBモデルなどに関わる幅広い技術開発を進めています。2018年の3月時点で、大学院生11名（博士課程8名、修士課程3名）、学部生14名（6年生3名、5年生1名、4年生5名、3年生5名）が研究室に在籍しています。4月より小林先生がAMED「次世代抗B型肝炎ウイルス薬導出に向けた創薬研究；H29-33年度」に共同研究者として参画し、また、10月からはJST・CREST「リンパシステム内ナノ粒子動態・コミュニケーションの包括的制御と創薬基盤開発；H29-34年度」に研究代表者として採択されたことから、研究室に最新の機器を導入することができました。今後の研究活動の大きな推進力となると考えています。



生物薬剤学

生物薬剤学研究室では、現在、教員3名（伊藤 晃成 教授、関根 秀一 講師、青木 重樹 助教）、大学院生9名（博士課程4名、修士課程5名）、学部生9名の体制で、医薬品による毒性発現の分子メカニズム解明とこれに基づく毒性予測法開発に向けた研究に取り組んでいます。教員では、関根講師が日本薬物動態学会奨励賞を、青木助教が千葉大学グローバルプロミネント研究基幹シンポジウムで優秀発表賞を受賞し、学生では、M2の藤森惣大君が日本薬物動態学会第32回年会でベストポスター賞を受賞するなど、日々の研究成果を積極的に外部に発信し、高い評価を得ております。今春3月の卒業生は、大学の教員、博士課程への進学、企業の研究職、病院の薬剤部へとそれぞれの道を歩き始めております。また1月には学部3年生4名を研究室に迎え、新たな体制で研究がスタートしています。研究室HPも是非覗いてみて下さい。



分子心血管薬理学

当研究室では、循環器疾患の病態解明やそれに基づいた新たな治療法の開発を目指した研究を行っています。高齢化や生活習慣の欧米化により、わが国でも心不全の患者数が増加傾向にあります。これまでたくさんの心不全治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者はまだ多くいます。特に重症の心不全では、生命予後は極めて悪く心臓移植しか治療法がありません。病気の進行を止めるような有効な治療薬を開発して社会に貢献したいと思います。ゼロからスタートした研究室ですが、メンバーは医学部の大学院生も合わせて10名を超える規模になりました。皆、頑張って基礎研究と臨床研究を進めています。



社会薬学

平成29年度は、教員3名、事務補佐員1名、大学院生6名、6年生5名、5年生5名、4年生5名の24名です。当研究室は臨床の課題を扱うため、様々な医療機関と連携をもちながら進めており、学外の方々などから多くの刺激を受けつつ、日々研鑽に励んでいます。また、地域貢献として、平成29年9月には、「くすりと安心してつきあう」及び「薬物の害と私たちの健康」、平成30年2月には「スポーツ倫理とドーピング」を開催

しました。これからも社会との連携を深め、臨床の課題に取り組んでいきたいと思ひます。



実務薬学

平成30年3月に卒業・修了生3名と教員2名を送別し、4月から新たに石川雅之助教を迎え、教員2名、6年生1名、5年生1名の総勢4名で新年度をスタートしました。

研究内容は、「スマホ血圧計の臨床現場への応用」、「点眼薬のアドヒアランスに関する研究」など引き続き臨床現場に近いテーマに加え、帝京大学との共同研究「ウリカーゼKOマウスにおけるNa、血漿尿酸濃度、尿酸トランスポーターとの関係」など基礎研究にも取り組んでいます。

また、千葉大学教育GP「グローバルエイジング時代の地域包括医療ケアを支える先導的薬剤師育成プログラムの開発」として地域で活躍できる薬剤師養成プログラムの作成にチャレンジしています。今後とも温かいご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

臨床薬理学

樋坂章博教授、佐藤洋美助教、畠山浩人助教、学部、修士、博士の学生がともに、研究室ではモデリングを1つのキーワードとして医療や新薬開発への応用を目指しています。今年も薬剤師卒業教育研修講座を附属病院薬剤部と共同で3回開催しました。学術活動ではHAB研究機構年会を樋坂教授が年会長で主催し、学会賞では畠山助教、照井さん、保月さんの受賞がありました。研究室旅行ではパラグライダーに挑み(写真)、記念すべき最長フライトは樋坂教授が獲得しました。9月に吉岡君が修士を早期修了(博士進学)、11月に落合君が無事卒論発表、3月には清水さんの修論発表です。また1月からB3を5名迎え、新体制が始まっています。



医療薬学

H29年度の医療薬学研究室では附属病院薬剤部講師の鈴木貴明が研究室の兼務となりました。また、10月1日付で藤吉正哉助教が岡山大学大学院医歯薬学総合研究科疾患薬理制御科学分野の准教授として昇任・転出いたしました。そしてH30年4月からは当研究室(旧病院薬学研究室)出身の内田雅士が病院薬剤部より助教として着任します。研究内容としては従来からの動脈硬化に関連した研究も続いていますが、医療現場での問題点を新たな研究テーマとして取り上げるなどこれまで以上に薬剤部との連携を進めていきたいと思ひます。その他、各種イベント等では研究室と薬剤部の交流もあり、学生も楽しく充実した研究室生活を過ごしています。



医薬品情報学(マツモトキヨシHD)寄附講座

平成30(2018)年4月現在、医薬品情報学研究室は教員3名(神崎哲人特任教授、石田大祐特任助教、境隆一特任助教)、学部生1名、事務補佐員1名となりました。

本研究室では、生活習慣病・動脈硬化症の基礎から臨床までの研究に取り組んでいます。具体的には、①動脈硬化症の危険因子の作用する動脈壁細胞の性質の研究。②精神疾患患者さんの生活習慣病、動脈硬化性疾患について、関連病院との共同研究。③高齢患者さんの向精神薬、生活習慣病治療薬の処方実態について、医薬品適正使用の観点からの調査研究などです。

また、マツモトキヨシHDの寄附講座である特徴を生かして、生活習慣病・動脈硬化症について産学連携で臨床的研究を進めていきます。



クラス通信

昭和23年卒業

長年続いた「新橋亭」のクラス会も中断して満2年になり、その間年賀状の欠札や今後の連絡不要との者も増えてきた。然しクラスの現況をお知らせするのが幹事の責任と考え、賀状や電話連絡を中心にその消息を調べた。

名簿順に①大塚享 調べた中では一番元気であった。②小沢博義 数年前から俺は天涯孤独と称していたが、今年の年賀状は宛先不明で戻ってきた。老人ホームにでも入り元気で居ればいいが？③小林剛 彼は昨年奥様を亡くし、茅ヶ崎にある医者付老人ホームに入居し快適に過ごしている。④片岡光明 名古屋在住で現在も元気に活動している。⑤清水正夫 横浜の本生元で散歩を中心の生活で元気に頑張っている。⑥高橋久男 クラス一番の高齢者、最近は気管支炎他で療養中。⑦長澤義男、⑧皆川忠義 元気ではあるが何れも強度の難聴で特に皆川君はヘルパーさんを頼んでいる状況。一切ヘルパーさんが応答する他外出一切なし。⑨中西安治 大分以前に胃の手術を行ったが、庭の散歩と昼寝で過す。⑩戸沢志朗、⑪奏和儀、⑫元吉邦宏、⑬山下錡一 以上4君は特に連絡は無いが、元気で推測した。

私共全員が今年で満90才以上になり年に不足は無いが、ここ迄くれば全員が東京オリンピック迄是非頑張りたいと念願して居る次第。(三浦 清)

昭和24年卒業

私も昭和24年度卒は戦後1期生、第1回の国家試験受験生と言っていたが、もはや寄る年波、皆90歳に近く近年同期会も持っていない。ただ訃報は私の所に通知してくるようになってきているがこの1年それも無いので皆それなりに過ごしておられる事と拝察している。

そこで近況に変えて、日ごろの思いを書かせていただきます。

近年の科学の進歩は加速度がついていると思う。特に原子科学、情報科学とDNAを始めとする生命科学と其の医療面の進歩は目を見張るものがある。

それと比べて政治は進歩どころか退歩していると思う。

自分の気に入らないニュースはフェイクと片づけ、気に入らない事実はアナザーファクトと切り捨てたら、意見を競わせ、より高く、より真実を求めることは不可能となる。

これは独善であり、最後は戦争か独裁への道となるかと暗然としている昨今である。(酒井 正嘉)

昭和25年卒業

去年3月、勝又敏雄君が急逝、今年1月には長く入院中だった三木春水君が亡くなった。両兄の生前の活躍(武田薬品/開局)を偲びご冥福を祈る許りである。

この2月現在、本人またはご家族と電話で近況を確

認できたのは東京2(角屋勇、松本皎)、神奈川(石井隆人)、千葉4(飯島昭治、森下良雄、成田昭和、鈴木昭治郎)、埼玉(佐子茂)の都合8名。宮原源三、田中照夫両兄は連絡が取れず案じている。

元気で活躍しているのは東京組の二人と石井君くらい。大方は年齢なりに一病、二患と取り組んで頑張っている。朝日のサンヤツで「卒寿で何がめでたい」なる広告を目にしたが、命あっての物種である。

同期最長老(前歴;東亜同文書院)は94歳、年若の御仁でも米寿を祝った筈である。この梅二月は格別寒さが厳しい。お互い充分用心、少しでも気分、体調の好転、小康を保てればと相共に願うものである。

(鈴木 昭治郎)

昭和31年卒業(三一會)

毎年5月、皇居を眺める丸ビルの中華料理店で懇親会を開催しています。昨年は10名が出席。前年4月に急逝した梅田鑑さんの奥様が、たつての希望で参加されたので11名となりました。80代半ばともなるとさすがに出席者が少なくなりますが、元気に近況を話し合うなど楽しいひと時を過ごしました。シルバーコーラスで歌っている人、毎日歩くのを日課にしている人など健康維持に励む人が多い一方で、腰痛のため外出できない人、脳梗塞の後遺症に悩む人などもみられます。

来年も沢山の人が参加できますように。東京駅丸の内側は皇居まで整備され、きれいになったとのこと。我々もあやかって若返りたいものです。(馬場 英子)

昭和32年卒業(千葉薬32会)



我々は、昭和32年に千葉大学薬学部を卒業した同期生46名で発足したクラス会である。残念ながら昨年までに14名の物故者を数えるに至っている。卒年に因んで千葉薬32会と名付け、始めの内は機運の盛り上がるごとに集っていたが、こここのところはやはり卒年より、原則として毎年3月2日、アクセスの良いJRと東京メトロ&御茶ノ水駅から徒歩から至近の東京医科歯科大学16階にホテルオークラが出店している レストランメディコで開催、今年も3月2日には10名が集まり旧交を暖めることが出来た。その場で当面今後6年の開催予定も確認された。

又在学中に創刊されたクラス雑誌CHAOSが、卒後60周年記念号として在籍者過半数の寄稿を得て昨春刊

2018年度 大学院医学薬学府入学者の状況（4月入学者）

修士（薬学領域）入学 50名：総合薬品科学専攻 50名
博士（薬学領域）入学 16名：先端医学薬学専攻（4年制） 5名
先端創薬科学専攻（3年制） 11名

第103回 薬剤師国家試験合格状況

平成30年2月24日～2月25日実施

新卒合格者 39名（合格率95.12%は全国73大学中、10位の成績です）

2017年度 卒業生・修了生の進路

学部4年制 42名

進学 40名：千葉大学大学院医学薬学府修士課程（40名）

企業 1名：大作商事(株)

その他 1名

学部6年制 41名

進学 2名：千葉大学大学院医学薬学府博士課程（薬学領域）（2名）

病院 11名：あそか病院、柏厚生総合病院、柏戸病院、葛飾赤十字産院、がん研究会有明病院、国立がん研究センター中央病院、新松戸中央総合病院、総泉病院、東京都立多摩総合医療センター、千葉大学医学部附属病院、名古屋大学医学部附属病院

企業 26名：(株)アイコン・ジャパン、アステラス製薬(株)、医薬品医療機器総合機構、大塚製薬(株)、キッセイ薬品工業(株)、極東製薬工業(株)、グラクソ・スミスクライン(株)、沢井製薬(株)、シミック(株)、JCRファーマ(株)、大日本住友製薬(株)、大鵬薬品工業(株)、田辺三菱製薬(株)、(株)トラストファーマシー、日本曹達(株)、日本調剤(株)（3名）、ポーラ化成工業(株)、マルホ(株)（2名）、Meiji Seikaファルマ(株)、(株)メディカルファーマシー、(株)メディセオ、持田製薬(株)、(株)リニカル

公務員 1名：厚生労働省 成田空港検疫所

未定 1名

修士修了 50名

進学 11名：千葉大学大学院医学薬学府博士課程（10名）、同志社大学大学院

企業 38名：イーピーエス(株)（2名）、医薬品医療機器総合機構、(株)エイアンドティー、栄研化学(株)、NOK(株)、OATアグリオ(株)、オリンパス(株)、杏林製薬(株)（2名）、広栄化学工業(株)、小林製薬(株)、(株)三和化学研究所、塩野義製薬(株)、シミック(株)、(株)新日本科学PPD、(株)新日本科学SMO、住友化学(株)、ゼリア新薬工業(株)、第一三共(株)、大正製薬(株)、大鵬薬品工業(株)、田辺三菱製薬(株)（3名）、中外製薬(株)（2名）、テクノプロR&D社（2名）、日産化学工業(株)、日本化薬(株)、日本新薬(株)、長谷川香料(株)、久光製薬(株)、日立化成(株)、(株)メディエンスプランニング、(株)ヤマノビューティーメイトグループ、(株)ワールドインテック

未定 1名

博士修了 28名

病院 2名：千葉県立循環器病センター、長野松代総合病院

企業等 16名：アステラス製薬(株)、(株)LSIメディエンス、大塚製薬(株)、カルフォルニア大学、神戸天然物化学(株)、国立医薬品食品衛生研究所、セントラル硝子(株)、綜研化学(株)、中外製薬(株)、テイカ製薬、帝人ファーマ(株)、ヒューマン・メタボローム・テクノロジーズ(株)、(株)マル・コーポレーション、みどり薬局、湧永製薬(株)、和光純薬工業(株)

ポスドクター 4名：サンパウロ大学、トロント大学、National Institute of Environmental Health Sciences、フランス国立科学研究センター

教員 3名：大阪大学、国際医療福祉大学、千葉大学大学院薬学研究院

帰国 2名：未定（中国）（2名）

その他 1名

2018年度 薬学部入学者の状況

入学者85名（男42名、女43名：推薦10名、前期64名、後期11名）

出身高校一覧

3名 大宮（埼玉）、市川（千葉）、日比谷（東京）、豊島岡女子学園（東京）

2名 県立川越（埼玉）、千葉東（千葉）、県立船橋（千葉）、東葛飾（千葉）、市立千葉（千葉）、渋谷教育学園幕張（千葉）、東京学芸大学附属（東京）、横浜翠嵐（神奈川）、厚木（神奈川）、吉田（山梨）

- 1名 仙台第二(宮城)、秋田(秋田)、会津学鳳(福島)、竜ヶ崎第一(茨城)、水海道第一(茨城)、竹園(茨城)、江戸川学園取手(茨城)、宇都宮東(栃木)、沼田(群馬)、中央(群馬)、浦和第一女子(埼玉)、蕨(埼玉)、栄東(埼玉)、春日部共栄(埼玉)、開智(埼玉)、県立千葉(千葉)、成田国際(千葉)、匝瑳(千葉)、木更津(千葉)、東海大学付属市原望洋(千葉)、八千代松陰(千葉)、昭和学院秀英(千葉)、青山(東京)、小石川(東京)、三鷹(東京)、雙葉(東京)、桜蔭(東京)、青稜(東京)、鴎友学園女子(東京)、駒場東邦(東京)、明治大学付属中野(東京)、私立城北(東京)、創価(東京)、国際基督教大学(東京)、川和(神奈川)、湘南(神奈川)、フェリス女学院(神奈川)、聖光学院(神奈川)、高田(新潟)、金沢泉丘(石川)、甲府西(山梨)、県立長野(長野)、野沢北(長野)、葦山(静岡)、浜松市立(静岡)、星陵(静岡)、岡崎(愛知)、国府(愛知)、島原(長崎)、真和(熊本)、宮崎西(宮崎)、鶴丸(鹿児島)、志學館高等部(鹿児島)

2017年の受賞記録

【教員の受賞】

- 平成29年1月 Highly Cited Researchers 2016(クラリベイト・アナリティクス社) 齊藤 和季(遺伝子資源応用)
 平成29年3月 日本薬学会賞 齊藤 和季(遺伝子資源応用)
 平成29年3月 日本薬学会奨励賞 畠山 浩人(臨床薬理)
 平成29年5月 日本生薬学会論文賞 齊藤 和季・山崎 真巳(遺伝子資源応用)
 平成29年5月 日本薬剤学会奨励賞 東 顕二郎(製剤工学)
 平成29年5月 Springer Nature「世界を変える論文」 齊藤 和季・山崎 真巳(遺伝子資源応用)
 平成29年7月 第4回国際植物代謝会議優秀ポスター賞 Rai Amit(遺伝子資源応用)
 平成29年7月 第33回日本DDS学会奨励賞 畠山 浩人(臨床薬理)
 平成29年9月 日本生薬学会学術奨励賞 小暮 紀行(生体機能性分子)
 平成29年11月 Highly Cited Researchers 2017(クラリベイト・アナリティクス社) 齊藤 和季(遺伝子資源応用)
 平成29年11月 日本薬物動態学会 平成29年度奨励賞 関根 秀一(生物薬剤学)
 平成29年11月 千葉大学グローバルプロミネント研究基幹シンポジウム優秀発表賞 青木 重樹(生物薬剤学)
 平成29年11月 Asian Core Program Lectureship Award (Taiwan) 根本 哲宏(薬化学)
 平成29年12月 平成30年度日本薬学会学術振興賞 准教授・荒井 秀(薬品合成化学)
 平成29年12月 平成29年度有機合成化学協会中外製薬研究企画賞 原田 慎吾(薬化学)

【学生の受賞】

- 平成29年3月 金田 結(M2) 学業成績優秀者に係る学長表彰(活性構造化学)
 平成29年3月 越智富美江(B5) 学術研究学生に係る学長表彰(活性構造化学)
 平成29年3月 日本薬学会第137年会 優秀発表賞 原 康雅(活性構造化学)
 優秀発表賞 森川 貴裕(薬品合成化学)
 優秀発表賞 照井 亜侑(臨床薬理)
 優秀発表賞 小野沢忠吉(生体機能性分子)
 優秀発表賞 和田 凌太(生体機能性分子)
 優秀発表賞 佐藤 優美(分子画像)
 優秀ポスター発表賞 村上 資(薬化学)
 平成29年4月 日本化学会第97春季年会 学生講演賞 天見 由佳(薬品合成化学)
 平成29年5月 日本薬剤学会第31年会永井財団学部学生七つ星薬剤師奨励賞 西村 美咲(製剤工学)
 平成29年6月 平成29年度日本生化学会関東支部例会 優秀ポスター賞受賞 平田 健介(分子細胞生物学研究室)
 平成29年6月 第15回次世代を担う有機化学シンポジウム ベストディスカッション賞 河野 将人(薬化学)
 平成29年6月 第24回日本HAB研究機構学術年会 優秀発表賞 保月 静香(臨床薬理)
 平成29年7月 第4回国際植物代謝会議 優秀ポスター賞 清水 陽平(遺伝子資源応用)
 平成29年7月 第136回日本薬理学会関東部会 優秀口頭発表賞 芦川 仁美(薬効薬理学)
 平成29年7月 第136回日本薬理学会関東部会 優秀口頭発表賞 田森 瑞貴(薬効薬理学)
 平成29年8月 次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2017 優秀口頭発表賞 田森 瑞貴(薬効薬理学)
 平成29年9月 第61回日本薬学会関東支部大会 優秀ポスター発表賞 矢藤 まり(生化学)
 優秀ポスター発表賞 徳武 友香(分子細胞生物学研究室)
 平成29年9月 第3回次世代を担う若手のためのレギュラトリーサイエンスフォーラム 優秀発表賞
 (日本薬学会レギュラトリーサイエンス部会) 高橋 一聡(予防薬学)
 平成29年9月 第16回合同シンポジウム「ポリアミンと核酸の共進化」優秀発表者賞 吉澤 祐希(病態分析化学)
 平成29年10月 メタルバイオサイエンス研究会実行委員長賞(日本毒性学会生体金属部会) 吉澤 智樹(予防薬学)
 平成29年11月 第34回反応と合成の進歩シンポジウム 富山学生ポスター賞 井崎亜利紗(薬品合成化学)
 平成29年11月 Travel Bursary Award for best oral or Poster Presentation (Fluids and Barriers of the CNS)
 山崎 由貴(薬物学)
 平成29年11月 第32回日本薬物動態学会年会 ベストポスター賞 藤森 惣大(生物薬剤学)
 平成29年11月 第43回反応と合成の進歩シンポジウム 富山学生ポスター賞 河野 将人(薬化学)

薬友会より

薬友会HPニュース ～HPがリニューアルされ、活発に活用いただいております～

平成13年学年理事（広報委員） 片桐 大輔

薬友会の皆様、いかがお過ごしでしょうか。さて、薬友会ホームページは一昨年リニューアルされました。（薬友会HPはこちら <http://yakuyukai.net/>）

多くの同窓生から情報をいただき、同窓会開催のお知らせや、ゐのはな山岳会の活動の情報、薬友会情報など、活発に情報を掲載しております。まだご覧でない方は是非、薬友会ホームページを訪れてみてください。

Facebookをご利用の方は、薬友会ホームページの情報をFacebookでもご覧いただけます。こちらのページ <https://www.facebook.com/yakuyukai/> をご覧ください。そして是非「いいね！」を押していただけると嬉しく思います。

皆様からの活動情報をいつでもお待ちしております。活動情報掲載のご希望は、下記の薬友会事務局までご連絡ください。

最後に、薬友会ホームページでは、広告協賛団体を募集しております。薬友会ホームページ運営のための貴重な収入として活用させていただく予定です。薬友会ホームページに広告協賛いただける方は、是非、ご連絡ください。お待ちしております。



<薬友会事務局>

薬友会に関連してのご質問、住所変更等のご連絡は下記までお願いします。

【薬友会HP「お問い合わせ」フォーム】:

<http://yakuyukai.net/contact>

【Eメール】: yakuyukai@chiba-u.jp

【F A X】: 043-226-2830

お知らせ

1) 薬友会のさらなる活性化のため、終身会員加入とご寄付をお願い申し上げます。

✓ 終身会員：会費2万円、昭和48年に開設（現在加入率75%程度）。

✓ ご 寄 付：一口2千円から随時受け付けています。同封の振込用紙に、①氏名、②住所、③卒業年度をご記入の上、お願い申し上げます。

■ 郵便局より振込の場合

<振替口座 00150-5-551796 千葉大学薬友会>

■ 他金融機関より振込の場合

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇一九（ゼロイチキョウ店） 店番：019

預金種目：当座 口座番号：0551796 口座名：千葉大学薬友会

2) 平成30年7月7日（土）の午前中に定期総会・常任理事会・役員会合同会議を開催します。詳細については薬友会のホームページをご覧ください。

平成30年度各種委員会名簿

（〇印：委員長。前委員長はアドバイザーとして参画。）

総務委員会 ○齊藤 和季、山崎 真巳、吉本 尚子、村上 泰興（S36）、西田 篤司（前委員長：アドバイザー）

財務委員会 ○石橋 正己、荒井 緑、石川 直樹、村上 泰興（S36）、伊藤 素行（前委員長：アドバイザー）

名簿委員会 ○伊藤 晃成、関根 秀一、青木 重樹、村上 泰興（S36）、樋坂 章博（前委員長：アドバイザー）

事業委員会 ○伊藤 素行、殿城亜矢子、溝口 貴正、森部久仁一（前委員長：アドバイザー）

広報委員会 会報担当部門：〇秋田 英万、小林カオル、田中 浩揮、加藤 文男（S47）、村山 俊彦（前委員長：アドバイザー）
情報担当部門：〇片桐 大輔（H13）、小林カオル

第27回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日 時：平成30年7月7日（土）

13：00～16：00

場 所：千葉大学薬学部120周年記念講堂

（医薬系総合研究棟Ⅱ 1階）

〒260-8675

千葉市中央区亥鼻1-8-1）

主 催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

共 催：日本薬剤師研修センター（参加者には日本薬剤師研修センターより単位が認定されます。）

テーマ：「創薬と医療薬学の新潮流」

生涯教育セミナー

1) 「自然免疫機構を介した炎症応答の理解と制御ーオミクス研究の観点からー」

齊藤 達哉 先生（徳島大学先端酵素学研究所）（薬友会員 平11年卒）

2) 「ゲノム医療の進歩」

曾根原 弘樹 先生（千葉大学病院産婦人科、ゲノムクリニック）

3) 「薬剤師と診療ガイドラインとの接点～生活習慣病領域を中心に～」

高志 昌宏 先生（日経BP社日経メディカル編集部）（薬友会員 昭58年卒）

宮木高明記念講演会

「臨床応用に向けたピロールイミダゾールポリアミド複合体の開発」

永瀬 浩喜 先生（千葉県がんセンター研究所）

終了後懇親会があります。 医薬系総合研究棟Ⅱ 大会議室（記念講堂の階下）

セミナー参加費 無料

意見交換会(懇親会)参加費 3,000円（当日）

参加申込み 不要です。当日お越しください。

本セミナーに関するお問い合わせは薬学研究院（生化学研究室） 伊藤素行までお願いいたします。

（電話／FAX：043-226-2890 email: mito@chiba-u.jp）



・JR千葉駅、京成千葉駅到着後、JR千葉駅東口正面7番のバス乗り場から「千葉大学病院」行きバス、または「南矢作」行きバスに乗り、「千葉大学薬学部前」で下車。約15分

卒後教育研究講座開催のお知らせ

本講座は千葉大学大学院薬学研究院・薬友会・医学部附属病院薬剤部共催の本学卒薬剤師を主な対象とする勉強会で、どなたでも参加できます。平成30年度は「日常診療に強い薬剤師～日々の課題に向き合おう～」を年間テーマとして以下の日程で開催します。本講座は日本薬剤師研修センター・認定薬剤師（2単位）および日本緩和医療薬学会・緩和薬物療法認定薬剤師（2単位）の集合研修会の認定を受けます（各回発行）。

第1回 平成30年4月21日（土）「高齢者の薬物治療を考える（1）」

講師：樋坂 章博（千葉大薬）、築地 茉莉子（千葉大病院）、小島 太郎（東大病院）

第2回 平成30年6月16日（土）「高齢者の薬物治療を考える（2）」

講師：來村 昌紀（らいむらクリニック）村上 純子（埼玉協同病院）、竹田 真理子（千葉大病院）

第3回 平成30年9月8日（土）「スポーツ、サプリメント、ポリファーマシー」

講師：鈴木 貴明（千葉大病院）、佐藤 洋美（千葉大薬）、大野 能之（東大病院）

各回とも午後1時30分～4時30分に千葉大学けやき会館大ホール（西千葉キャンパス）で開催します。予約不要（各回参加費2000円）です。各回の内容等は薬友会のホームページに掲載予定です。また、<http://www.p.chiba-u.jp/lab/cpp/seminar.html>には、これまでの活動も含めて詳細に掲載しています。またお気軽に臨床薬理学研究室 佐藤洋美（TEL/FAX043-226-2877）までお問い合わせ下さい。

編集後記

薬友会の会員の皆様の大なる御協力を頂きまして誠にありがとうございました。また、御寄稿頂いた皆様方に厚く御礼申し上げます。

広報委員会 会報担当部門

秋田 英万（委員長）、小林 カオル、田中 浩揮、加藤 文夫（S47）、村山 敏彦（前委員長）